

『近世禅林僧宝伝』「序文」「凡例」は難解なのか

加藤 一 寧

はじめに

僧伝の多くは漢文で記されている。そのため学生が一人の僧について調べようとすると、漢文の読解力が必要となる。しかし大学入試に漢文はほぼ課せられず、一から漢文を学習し直す必要がある。いや、それ以前に現代文の読解すらままならないのだから、読書法についても指導が必要である。

そこで私は漢文を扱う授業で、年に一、二回「書き下し文のまちがい探し」という課題を課すことにした。そしてその教材として、能仁晃道訓注『訓読 近世禅林僧宝伝』（禅文化研究所、二〇〇二）が書き下した『近世禅林僧宝伝』「序文」「凡例」をとりあげたことがある。¹⁾ というのは、一つには「序文」「凡例」の書き下し文にまちがいが多かったからであり、二つには序文凡例、すなわちまえがきは、読書において重要な箇所でもあったからである。²⁾

たとえば効率的な読書法の一つ、すなわち「目次とまえがき・結びを読めば、読まなくてよい本を外にはじきだせる」という読書法を安易に見習うと、「序文」「凡例」のまちがった書き下し文のせいで、『近世禅林僧宝伝』を読まなくてよい本として外にはじきだしてしまうおそれもある。³⁾

そこで授業では二つのことを行なった。まず「序文」「凡例」の一、二箇所に対して、根拠となる書籍や参考書を示し、書き下し文のまちがいを具体的に指摘した。次に学生に「序文」「凡例」のごく一部分を精読させて、自分に読解力がなければ、効率的な読書法を見習っても、読むべき本とそうでない本の見分けがつかないことに気づいてもらった。やはり地道に読解力をつける以外に近道はないのである。

本稿では、かかる目的で課した課題の解答を以下に示すこととする。

一、『近世禪林僧宝伝』「序文」書き下し文の誤り

最初に『訓読 近世禪林僧宝伝』が句読を切った『近世禪林僧宝伝』「序文」の本文と書き下し文を掲げる。ちなみにこの『近世禪林僧宝伝』「序文」本文は、富岡鉄斎と伊藤紀によつて墨書されている。⁽⁴⁾ なお以下、傍線等は私が挿入した。

・本文（『訓読 近世禪林僧宝伝』上巻、三・四頁）
近世禪林僧宝伝序

自吾初祖菩提達磨、以不立文字直指人心之宗旨、別開法門。a 於是統焰聯芳、灯灯相伝、化化互照、醜唱捷峻影響。弗啻流委混混、遂盈溢四海矣。

然而英傑俊士專奉宗旨。不敢事文字、是以雖其機縁言行、往往足啓発後学、而多不伝于世。誠此亦為可惜焉。

至宋景德中、有沙門道原者、始編成伝灯録三十卷、及普灯続灯等若干卷、続出通刊、播布遐邇。於是吾宗祖祖機縁、始昭哲于後矣。

b 其在本朝、則自推古帝之世、達磨遊化本邦之時機、亦漸熟。其后吾二十四流宗祖、①明庵道元輩出自建久安貞間、至応仁及慶長中、c 王公侯伯欽風仰抱名寺巨刹、每州並峙、中外高僧輪次視篆、盛豎法幢、立宗旨者、建久以来五百余載、世世不乏其人。然而未有能緝録其間諸賢言行者。至延宝中、

相州師蛮者、深慨之、乃始輯撰延宝伝灯録四十卷。所收幾乎一千余人。誠可謂偉業矣。

自是厥後百五十年余、宗乘之不振日甚。幸有吾鵠林白隱老出、触正受端之惡毒、遂振起已墜之宗風。其輪下得人亦不少。祖師真風、於是再昭昭于世矣。d 顧其前後、所出宿德碩師、亦誠不為寡。而其異言奇行、至今未有記述、以伝後者。可謂闕典矣。

予弱冠以来、窃不自揆、志其纂輯者久。嚮者適因事在薩州者殆一年。幽居多暇。於是始從事於斯。然當時唯尋繹予所暗記平生見聞、隨得敘録之。是以至其詳備、則多不能如意。及其後帰山、更就各師本寺、歷問其行事、網羅補苴者殆十年。于此所録、幾乎一百余人。乃忘固陋、編次成数卷、号曰近世禪林僧宝伝焉。

世之叢林之士、倘由斯編以觀古人言行、且能矜式其枯澹生涯、則庶乎灯灯相続、宗風永不墜焉。此予編次之微志也。如其訛漏、則謹俟後哲之補正、云爾。

明治廿二年六月

相国承天禪寺退耕庵独園撰

・書き下し文

近世禪林僧宝伝序

吾が初祖菩提達磨より、不立文字直指人心の宗旨を以て、別に法門を開く。A是に於いて統焰聯芳、灯々相伝え、化々互いに照らす。禪唱、影響を捷峻にす。畜に流れ混々たるに委ぬるのみならず、遂に四海に盈ち溢る。

然して英傑の俊士、専ら宗旨を奉じ、敢えて文字を事とせず。(1)是れを以て、其の機縁言行、往々、後学を啓発するに足ると雖も、而も多く世に伝わらず。誠に此れ亦た惜しむべきと為す。

宋の景德中に至つて、沙門道原なる者有つて、始めて『伝灯録』三十卷を編成し、『普灯』『続灯』等若干卷、続出通刊され、遐邇に播布さるに及ぶ。是に於いて吾が宗祖々の機縁、始めて後に昭哲せらる。

B其の本朝に在つては、則ち推古帝の世、達磨、本邦に遊化するの時機より、亦た漸く熟す。其の後、吾が二十四流の宗祖、明庵・道元、輩出す。建久・安貞の間より、応仁及び慶長中に至り、C王公侯伯の欽風仰挹する名寺巨刹、州毎に並び峙ち、中外の高僧、輪次に視象し、盛んに法幢を豎て、宗旨を立する者、建久以来五百余載、世々其の人に乏しからず。然り而うして未だ能く其の間の諸賢の言行を緝録する者有らず。延宝中に至り、相州の師蛮なる

『近世禅林僧宝伝』「序文」「凡例」は難解なのか

者、深く之を慨き、乃ち始めて、『延宝伝灯録』四十卷を輯撰す。収むる所、幾乎ど一千余人。誠に偉業と謂うべし。是れより厥の後、百五十年余、宗乘の不振、日に甚だし。幸いに吾が鶴林白隱老の出づる有つて、正受端の悪毒に触れ、遂に已墜の宗風を振起す。其の輪下、人を得ること亦た少なからず。祖師の真風、是に於いて再び世に昭々たり。D其の前後を顧みるに、出づる所の宿徳碩師も、亦た誠に寡なしと為さず。而して其の異言奇行、今に至るまで未だ記述有らず。以て後に伝うること、典を闕くと謂うべし。

予、弱冠より以来、窈かに自ら撰らず、其の纂輯を志すこと久し。嚮きに、適たま事に因つて薩州に在ること、殆ど一年。幽居、暇多し。是に於いて始めて斯れに従事す。然れども當時は唯だ予が暗記する所の平生の見聞を尋繹し、得るに随つて之を敘録するのみ。(2)是れを以て、其の詳細に至つては、則ち多く能く意の如くならず。其の後、帰山するに及び、更に各師の本寺に就いて、其の行事を歴問し、網羅補苴すること殆ど十年。此に録する所、幾乎ど一百余人。乃ち固陋を忘じ、編次して教卷を成し、号して『近世禅林僧宝伝』と曰う。

世の叢林の士、倘し斯の編に由つて、以て古人の言行を

観、且つ能く其の枯澹の生涯を矜式せば、則ち灯々相続き、宗風永く墜ちざるに庶乎からんか。此れ予が編次の微志なり。其の訛漏の如きは、則ち謹んで後哲の補正を俟つと、爾云う。

……

以下【一】は『訓読 近世禅林僧宝伝』の原文、『《》』は私の解答案である。

(一) 傍線 a

・句読

×【於是続焰聯芳、灯灯相伝、化化互照、齠唱捷峻影響。弗啻流委混混、遂盈溢四海矣】

○《於是、続焰聯芳、灯灯相伝、化化互照、齠唱捷峻。影響弗啻、流委混混、遂盈溢四海矣》

まず「捷」の字は『近世禅林僧宝伝』を確認すると、「捷」とある。また「延宝伝灯録序」には「皆是英傑、灯々互照、齠唱捷峻、電卷雷奔。児孫繩々、盈溢四海矣」ともあって、「齠唱捷峻」で句読を切っているので、傍線 a も「齠唱捷峻、影響」の句読が正しい。

次に「影響。弗啻流委混混」は「影響弗啻、流委混混」と句読を切るべきである。なぜならば第一に「影響」は後の史

料だが、「続禅林僧宝伝第一輯序」「続焰聯芳、承虚接響、児孫繩繩、真風蕩蕩也」(『訓読 近世禅林僧宝伝』上巻、二三三頁)の「承虚接響(二形ばかりうけつぐ)」とほぼ同じ意味であり、第二に「弗啻」は、花園大学図書館「おすすめ図書」古田島洋介『日本近代史を学ぶための文語文入門 漢文訓読体の地平』(吉川弘文館、二〇一三) 一〇六頁に、記憶しておきたい訓読表現として「(不啻)を後置した(不啻ナラ)〓(〓も啻ならず)」が挙げられているからである。

最後に「流委」は、「委」に「末」の意があり、この場合、前掲「延宝伝灯録序」の「児孫」と同じ意味と考える。

・書き下し文(傍線 A)

×【是に於いて続焰聯芳、灯々相伝え、化々互いに照らす。齠唱、影響を捷峻にす。啻に流れ混々たるに委ぬるのみならず、遂に四海に盈ち溢る】

○《是に於いて続焰聯芳、灯々相伝え、化々互いに照らし齠唱捷峻たり。影響も啻ならず、流委混々として遂に四海に盈ち溢る》

・訳

そこで禅の宗旨は面々接受嫡々相承され、その教化も肝胆相照らし、師資の応酬も敏捷かつ峻厳であった。そのため禅

の宗旨が受けつがれただけでなく、児孫が続々と輩出され、そして天下に満ちあふれた。

(2) 傍線b

・句読

×【其在本朝、則自推古帝之世、達磨遊化本邦之時機、亦漸熟】

○《其在本朝、則自推古帝之世、達磨遊化本邦之時、機亦漸熟》

傍線bは「延宝伝灯録序」「本朝推古之曆、達磨遊化此方、而時機未熟」をふまえているので、「機亦漸熟」の句読が正しい。

・書き下し文(傍線B)

×【其の本朝に在っては、則ち推古帝の世、達磨、本邦に遊化するの時機より、亦た漸く熟す】

○《其の本朝に在っては、則ち推古帝の世、達磨、本邦に遊化するの時より、機も亦た漸く熟す》

・訳

日本では推古朝に達磨が遊化したが、その時から徐々に禅を受け入れる機運も熟していった。

(3) 傍線c

・句読

×【王公侯伯欽風仰挹名寺巨刹、毎州並峙、中外高僧輪次視

篆、盛豎法幢、立宗旨者、建久以来五百余載、世世不乏其人】

○《王公侯伯、欽風仰挹、名寺巨刹、毎州並峙。中外高僧、

輪次視篆、盛豎法幢、立宗旨者、建久以来、五百余載、世世不乏其人》

傍線cは「延宝伝灯録序」而王公侯伯、欽風仰挹、伽藍鉅刹、毎州竝峙。和宋名刹、輪次視篆、豎法幢、立宗旨、代不乏其人」をふまえ、以下の対句を含むので、句読の誤りは明白である。

王公侯伯、欽風仰挹、

名寺巨刹、毎州並峙。

・書き下し文(傍線C)

×【王公侯伯の欽風仰挹する名寺巨刹、州毎に並び峙ち、中外の高僧、輪次に視篆し、盛んに法幢を豎て、宗旨を立する者、建久以来五百余載、世々其の人に乏しからず】

○《王公侯伯は風を欽んで仰挹し、名寺巨刹は州毎に並峙す。

中外の高僧、輪次に視篆し、盛んに法幢を豎て宗旨を立つる者、建久より以来五百余載、世々其の人に乏しからず》

・訳

王公侯伯はその宗風を慕って仰ぎ崇め、名寺巨刹も州ごとに並びそびえ立っている。そして日中の高僧たちが順番に視篆したので、盛んに宗風を挙揚し新たに宗旨を立てる者も、

建久年間以来、五百余年の間、代代その人材にこと欠かなくなつた。

(4) 傍線 d

・句読

×【顧其前後、所出宿徳碩師、亦誠不為寡。而其異言奇行、至今未有記述、以伝後者。可謂闕典矣】

○《顧其前後所出宿徳碩師、亦誠不為寡。而其異言奇行、至今未有記述以伝後者。可謂闕典矣》

否定の「未」がどこまで係るか、すなわち「管到」の問題となる。ここでは「至今未有記述以伝後者」の句読が正しい。

・書き下し文（傍線 D）

×【其の前後を顧みるに、出づる所の宿徳碩師も、亦た誠に寡なしと為さず、而して其の異言奇行、今に至るまで未だ記述有らず。以つて後に伝うることを、典を闕くと謂うべし】

○《顧みるに、其の前後出づる所の宿徳碩師も亦た誠に寡なしと為さず。而れども其の異言奇行、今に至るまで未だ記述し以て後に伝うる者有らず。典を闕くと謂うべし》

・訳

ふりかえると、白隠前後に輩出した宿徳碩師も実際少なくなかつたが、そのすばらしい言行は今まで記録して後世に伝

えられることはなかつた。遺漏と云うほかない。

(5) その他

・句読

傍線①

《明庵道元輩出。自建久安貞間》が正しい。単なる校正ミスであろう。

・書き下し文

傍線(1)・(2)

《是を以て》と読む。後掲の傍線(6)も同じ。

二、『近世禪林僧宝伝』「凡例」書き下し文の誤り

「凡例」も、もとは白文である。

・本文（『訓読近世禪林僧宝伝』上巻、五・六頁）

凡例五則

一、従前輯撰禪林諸伝者、多以伝灯為書名、且冠以撰時之年号、如宋代之景德伝灯録、本朝之延宝伝灯録是也。本書

雖蒐録無難以来諸宗師伝、以嗣延宝之録、然只照其人生卒年代略次第之、不必規規。拘衣鉢之統脈故、不敢襲用二

録之名。止題曰近世禪林僧宝伝。其不冠年号者、避称謂之不順也。

一、f 無難以來、伝灯宗師、彬彬輩出。但其人或殊操履、其躡隨隔頭晦。g 此撰雖務期闡發。然恐尚有佚於幽潛。拾遺補闕之助、吾深屬望來者。

一、h 諸伝事蹟、或捫荆棘叢談所載、或取諸余記憶、或質之于各師本寺、斟酌剪裁、纔具顛末。然其間所欠漏者、不一而足。i 即若各伝中、唯存機緣語句、而佚享壽臘數等、凡不可無者此皆係歷多方搜檢而竟不可端倪者。雖極知其失体、然姑存以備伝數。讀者諒旃。

一、諸宗師中、或有勅賜諡号徽称、或有否者、参差不均。本書著題一切揭以某和尚。不唯避分別之繁。蓋以人人所通知者称之、極易檢尋也。若其勅賜号称、則固既登載伝文中。非敢略之也。

一、j 緇林外修禪者、古來寔繁。有徒苟分伝灯脈者、雖非名流、亦可伝其人。k 故今微前輩居士伝等例録。其最可伝者若干人、以附于僧宝之後云。

一、初余蒐輯諸伝、隨得隨録、如第三則所言。是以其体裁行文等、種種不同。素欲手加刪訂、俾埤畫一、l 顧法務大劇、弗暇操觚。m 於是囑所識京儒灌園石津氏、自諸宗師原語成文外、凡係撰者記述者、字梳句櫛潤色之、略一貫全書通体焉。n 而其整次校讐以下、至授梓製本凡百之役、則宗

海全信及指月居士、皆拮据周旋之乃成就。吾著撰者、実為氏与三子之力。其勞不可湮沒。因附記于此。

撰者識

書き下し文

凡例五則

一、従前輯撰の禪林の諸伝は、多く伝灯を以て書名と為し、(3)且つ撰時の年号を以て冠す。宋代の『景德伝灯録』、本朝の『延宝伝灯録』が如きは是れなり。本書は、無難以來の諸宗師の伝を蒐録し、以て延宝の録を嗣ぐと雖も、E 然も只だ其の人の生卒年代に照らし、略ぼ之れを次第するも、必ずしも規々せず。衣鉢の統脈に拘わることが故に、敢えて二録の名を襲用せず。止だ題して『近世禪林僧宝伝』と曰うのみ。其の年号を冠せざるは、称谓の不順を避くるなり。

一、F 無難以來、伝灯の宗師、彬々として輩出す。但だ其の人、或いは操履を殊にし、其の躡隨、頭晦を隔つ。G 此の撰、闡發を期するを務むと雖も、然も恐らくは尚お幽潛に於いて佚有らん。遺を拾い闕を補うの助け、吾れ深く属望し來たる者なり。

一、H 諸伝の事蹟、或いは『荆棘叢談』の所載に拠り、或いは諸余の記憶を取り、或いは之を各師の本寺に質し、

斟酌剪裁し、纒かに顛末を具す。然れども其の間の欠漏する所は、一にして足らず。I即ち若し各伝の中、唯だ機縁の語句を存するのみにして、享寿臘数等を佚すること、凡そ無かるべからざるは、此れ皆な多方搜檢を歷るも竟に端倪すべからざる者に係る。極めて其の失体を知ると雖も、然も姑らく存して以て伝数を備う。読者、施れを諒せよ。

一、諸宗師の中、或いは勅賜諡号徽称有り、或いは否らざる者有り、参差として均しからず。(4)本書は、署題一切、某和尚を以て掲ぐ。唯だ分別の繁を避くるのみならず。蓋し人々に通知さるる者を以て之を称し、極めて檢尋を易くするなり。其の勅賜号称の若きは、則ち固より既に伝文中に登載す。敢えて之を略するに非ざるなり。

一、J緇林の外に禪を修する者、古來、寔に繁し。徒の苟も伝灯の脈を分かつ者は、名流に非ずと雖も、亦た其の人を伝うべし。K故に今、前輩の居士伝等の例録に倣う。其の最も伝うべき者若干人、以て僧宝の後に附すと云う。

一、初め余、諸伝を蒐輯し、(5)得るに隨い、録するに隨うこと、第三則に言う所の如し。(6)是れを以て、其の体裁行文等、種々同からず。(7)素とより手を刪訂に加え、画一に帰せしめんと欲するも、J法務を顧みれば大いに劇しく、

操觚に暇弗す。M是に於いて、識る所の京儒灌園石津氏に囑み、諸宗師の原語成文より外、凡そ撰者記述者に係り、字梳句櫛もて、之を潤色せしめ、略ぼ一貫し、全書通体す。N而して其の整次校讐以下、授梓製本に至る凡百の役は、則ち宗海・全信及び指月居士、皆な之を拮据周旋し、乃ち成就す。吾が著撰は、實に氏と三子との力と為す。其の勞、湮没すべからず。因つて此に附記す。

(6) 傍線 e

・句読

×【然只照其人生卒年代略次第之、不必規規。拘衣鉢之統脈故、不敢襲用二録之名。止題曰近世禪林僧宝伝】

○《然只照其人生卒年代略次第之、不必規規拘衣鉢之統脈。故不敢襲用二録之名、止題曰近世禪林僧宝伝》

部分否定の「不必」の「管到」が問題で、「不必規規拘衣鉢之統脈」の句読が正しい。

・書き下し文(傍線E)

×【然も只だ其の人の生卒年代に照らし、略ぼ之れを次第するも、必ずしも規々せず。衣鉢の統脈に拘わるが故に、敢えて二録の名を襲用せず。止だ題して近世禪林僧宝伝と曰

うのみ】

○《然れども只だ其の人の生卒年代に照らし、略ぼ之を次第するのみ。必ずしも規々として衣鉢の統脈に拘わらず。故に敢えて二録の名を襲用せず、止だ題して近世禅林僧宝伝と曰うのみ》

・訳

しかし僧伝の配列はただ生寂年の順番にしたがって、おおまかに並べただけで、必ずしも嗣法関係を厳守していない。だから『景德伝灯録』『延宝伝灯録』の両書にある伝灯の語を踏襲して書名につけたりはせず、ただ『近世禅林僧宝伝』と題した。

(7) 傍線 F

・書き下し文(句読に問題なし)

×【無難以来、伝灯の宗師、彬々として輩出す。但だ其の人、或いは操履を殊にし、其の躡随、顕晦を隔つ】

○《無難以来、伝灯の宗師、彬々として輩出す。但だ其の人、或いは操履を殊にし、其の躡随したかつて顕晦を隔つ》

以下の対句が含まれ、「或いは」に対応する「随」は「随しなつて」と読むべきである。

其人或殊操履、

其躡随隔顕晦。

・訳

至道無難以来、伝灯の宗師が続々と輩出されている。ただその人物によって言行に違いがあり、それに応じて事績についても明らかな点もあれば、不明な点もある。

(8) 傍線 G

・書き下し文(句読に問題なし)

×【此の撰、闡発を期するを務むと雖も、然も恐らくは尚お幽潜に於いて佚有らん。遺を拾い闕を補うの助け、吾れ深く属望し來たる者なり】

○《此の撰、務めて闡発を期すと雖も、然れども恐らくは尚お幽潜に佚すること有らん。拾遺補闕の助、吾れ深く來者に属望す》

傍線 g 「吾深属望來者」の「來者」は「後輩」を意味する。

・訳

この『近世禅林僧宝伝』では事績を明らかにしようとしてめたが、しかし潜隱の祖師の記録にはとりこぼしがあるだろう。不十分な点や訂正すべき点については、後の方々の補訂を望む。

(9) 傍線H

・書き下し文(句読に問題なし)

×【諸伝の事蹟、或いは『荊棘叢談』の所載に拠り、或いは

諸余の記憶を取り、或いは之を各師の本寺に質し】

○《諸伝の事蹟、或いは『荊棘叢談』の所載に拠り、或いは

諸を余が記憶に取り、或いは之を各師の本寺に質し》

「諸」は「之於」の縮約語で「これ」と読む。

・訳

諸伝の事蹟は『荊棘叢談』の記載によつて記したのもあれば、私の記憶によつて記したのもある。また各僧所屬の本山寺院に質問して記したものもある。

(10) 傍線i

・句読

×【即若各伝中、唯存機縁語句、而佚享寿臘数等、凡不可無者此皆係歴多方搜檢而竟不可端倪者。雖極知其失体、然姑存以備伝数】

○《即若各伝中、唯存機縁語句而佚享寿臘数等凡不可無者、

此皆係歴多方搜檢而竟不可端倪者。雖極知其失体、然姑存

以備伝数》

「即若」は「即ち」の若き」と読み、「たとえば」を意味する。

・書き下し文(傍線I)

×【即ち若し各伝の中、唯だ機縁の語句を存するのみにして、

享寿臘数等を佚すること、凡そ無かるべからざるは、此れ

皆な多方搜檢を歴るも竟に端倪すべからざる者に係る。極

めて其の失体を知ると雖も、然も姑らく存して以て伝数を

備う】

○《即ち各伝の中、唯だ機縁の語句を存するのみにして、享

寿臘数等凡そ無かるべからざる者を佚するが若きは、此れ

皆な多方搜檢を歴るも竟に端倪すべからざる者に係る。極

めて其の体を失するを知ると雖も、然れども姑らく存して

以て伝の数に備う》

・訳

たとえば僧伝の中で、ただ機縁の語句だけが記載され、世寿法臘など当然のせるべき事柄が記載されていない場合があるが、これは四方八方手を尽くしても、結局、手がかりが得られず、調べがつかなかったたのである。伝記の体をなしていないのは百も承知しているが、そのまま収録して僧伝の数に加えておく。

(11) 傍線j

・句読

×【緇林外修禪者、古来寔繁。有徒苟分伝灯脈者、雖非名流、亦可伝其人】

○《緇林外修禪者、古来寔繁有徒。苟分伝灯脈者、雖非名流、亦可伝其人》

【書經】仲虺之誥に「簡賢附勢、寔繁有徒（賢を簡にし勢に附く、寔に繁く徒有り）」とあるので、「古来寔繁有徒」の句説が正しい。

・書き下し文（傍線J）

×【緇林の外に禪を修する者、古来、寔に繁し。徒の苟も伝灯の脈を分かつ者は、名流に非ずと雖も、亦た其の人を伝うべし】

○《緇林の外に禪を修する者、古来、寔に繁く徒有り。苟も伝灯の脈を分かつ者なれば、名流に非ずと雖も亦た其の人を伝うべし》

・訳

叢林外で禪定を修した人物は昔から大勢いる。もし嗣法しているのなら、たとえ名流でなくとも、その人物の事績は後世に伝えなければならない。

(12) 傍線k

・句読

『近世禪林僧宝伝』「序文」「凡例」は難解なのか

×【故今倣前輩居士伝等例録。其最可伝者若干人、以附于僧宝之後云】

○《故今倣前輩居士伝等例、録其最可伝者若干人、以附于僧宝之後云》

「倣……例」は定型句なので、「例」の下で句説を切るべきである。

・書き下し文（傍線K）

×【故に今、前輩の居士伝等の例録に倣う。其の最も伝うべき者若干人、以て僧宝の後に附すと云う】

○《故に今、前輩の居士伝等の例に倣って、其の最も伝うべき者若干人を録し、以て僧宝の後に附すと云う》

・訳

だからここでは、それ以前の居士伝などの例に倣って、最もその事績を後世に伝えなければならない人物の若干名を収録して、『近世禪林僧宝伝』の末尾に付した。

(13) 傍線L

・書き下し文（句説に問題なし）

×【法務を顧みれば、大いに劇しく、操觚に暇弗す】

○《顧だ法務大いに劇しく、操觚に暇あらず》

「顧」は逆接を意味する「ただ」と読む方がよい。¹⁶⁾

・ 訳

しかし法務が多忙で、著述の時間がなかった。

(14) 傍線 M

・ 書き下し文（句読に問題なし）

× 【是に於いて、識る所の京儒灌園石津氏に囑み、諸宗師の原語成文より外、凡そ撰者記述者に係り、字梳句櫛もて、之を潤色せしめ、略ぼ一貫し、全書通体す】

○ 《是に於いて、識る所の京儒灌園石津氏に囑し、諸宗師の原語成文より外、凡そ撰者の記述するに係る者、字梳句櫛し、之を潤色し、略ぼ一貫し、全書通体せしむ》

傍線 m の「外」は「^{ほか}の外に…も」を意味し、「外」の前後の「[〜]」と「[…]」には同じ性質の語句が入る。しかし傍線 M 「諸宗師の原語成文」は語録等を表し、「撰者記述者」は撰者等の人物を意味する。この場合、「撰者記述者」は「撰者が記述する文章」と解釈すべきである。

・ 訳

そこで旧知の京都の儒者石津灌園氏に依頼して、祖師の言句や文章はもちろん、撰者である私が記述すべき文章に至るまで推敲執筆していただき、ほぼ一貫して全体の体裁を整えてもらった。

(15) 傍線 n

・ 句読

× 【而其整次校讐以下、至授梓製本凡百之役、則宗海全信及指月居士、皆拮据周旋之乃成就。吾著撰者、実為氏与三子之力】

○ 《而其整次校讐以下至授梓製本凡百之役、則宗海全信及指月居士、皆拮据周旋之。乃成就吾著撰者、実為氏与三子之力》『続禅林僧宝伝』第一輯「凡例」〔訓読 近世禅林僧宝伝上巻、二二六頁〕は傍線 n をふまえているので、その句読にしたがう。

・ 書き下し文（傍線 N）

× 【而して其の整次校讐以下、授梓製本に至る凡百の役は、則ち宗海・全信及び指月居士、皆な之を拮据周旋し、乃ち成就す。吾が著撰は、実に氏と三子との力と為す】

○ 《而して其の整次校讐より以下授梓製本に至る凡百の役は、則ち宗海・全信及び指月居士、皆な之を拮据周旋す。乃ち吾が著撰を成就するは、実に氏と三子の力と為す》

・ 訳

しかも編集校正から印刷製本に至るまでの様々な工程については、宗海・全信及び指月居士の三人が懸命に事に当たり

奔走してくれた。だからこの『近世禅林僧宝伝』が完成したのは、実のところ石津氏とこの三人のおかげである。

(16) その他

・書き下し文

傍線(3)

《且つ冠するに撰時の年号を以てす》が正しい。¹⁷ 傍線(4)も

同様。

傍線(5)

《随つて得れば、随つて録す》が正しい。¹⁸

傍線(7)

《素とより手^てずから刪訂を加え、画一に帰せしめんと欲するも》が正しい。¹⁹

おわりに

以上、授業の課題「書き下し文のまちがい探し」でとりあげた『訓読 近世禅林僧宝伝』のまちがい、すなわち『近世禅林僧宝伝』「序文」「凡例」の書き下し文の主なまちがいを漢文の参考書などを根拠に指摘した。

そして上掲のように「序文」「凡例」の漢文が難解でない以上、「序文」「凡例」の書き下し文にまちがいが多いのは、

『近世禅林僧宝伝』「序文」「凡例」は難解なのか

以下のことが原因だと推測される。すなわち「『訓読 近世禅林僧宝伝』は、〈序文〉〈凡例〉以外の箇所については『近世禅林僧宝伝』に付された訓点や送り仮名にしたがって、そのまま機械的に書き下すことができたが、〈序文〉〈凡例〉の漢文は白文であったために正確に読解できなかった」と。しかも編集校正のチェックも素通りしてしまったのである。

これは句読訓読のまちがいのみならず、序文凡例という読書において重要なまえがき部分を一層読みがたくしてしまっただ点でも問題である。だが『訓読 近世禅林僧宝伝』は、その出版からすでに十七年も経っているのに、今さらその批判をしてもあまりにも遅すぎる。

ただそれでも平成三二年の凡俗の私の脳裏には『訓読 近世禅林僧宝伝』「まえがき」三頁の言葉が虚しく浮かぶのであった。

この訓読本にいささかの意義があるとすれば、原撰者の文鼎老師は、その凡例で、「凡^{およ}そ現代の人士、多くは漢文を忌^き避^ひして、以て読み難^{がた}しと為^なす」と嘆いておられるが、その読み難い漢文を、訓読したのみにある。未^{いま}だ古典教育が衰微していない、昭和二年の「現代の人士」でさえ斯^{かく}の如しであれば、況^{いは}んや、漢字離れ・活字離れが

叫ばれて久しい、平成十四年の「現代の人士」においてをやである。

注

1 『訓読 近世禅林僧宝伝』は、荻野独園撰『近世禅林僧宝伝』（貝葉書院、一八九〇）と小島文鼎撰『統禅林僧宝伝』

（貝葉書院、一九二八刊・禅門高等学院出版部、一九三八追補）の訓注本である。この両書は、卍元師蛮撰『延

宝伝灯録』等の後をうけて編纂された日本近世以後の禅

僧伝で、昭和四八年（一九七三）に思文閣出版より洋装

本全三巻として影印復刻されている。

2

花園大学図書館「おすすめ図書」佐藤優『読書の技法 誰でも本物の知識が身につく熟読術・速読術「超」入門』

（東洋経済新報社、二〇一二）四五・五一・九五頁によ

れば、読書で最初に行なうことは、熟読する本を絞り込

むための速読である。その方法の一つは以下の通り。目

次とまえがき・結びを注意深く読み、全頁にざっと目を

通すと、読まなくてよい本を外にはじきだせ、精読すべ

き箇所もおのずから明らかになる。そしてまえがきは古

典籍では序文と凡例に該当する。序文凡例については、

花園大学図書館「授業の参考文献」堀川貴司『書誌学入

門 古典籍を見る・知る・読む』（勉誠出版、二〇一〇）

五七〜九頁参照。

3 注2参照。

4 『近世禅林僧宝伝』第一巻（思文閣出版影印本、一九七三）

一〜二五頁・国立国会図書館デジタルコレクション

<http://dlndi.go.jp/info:ndljp/pid/822935>（但し伊藤紀の

墨書は未収録）参照。

5 注4参照。

6 『大日本仏教全書』第一〇八巻（仏書刊行会、一九一七）

四〇頁・国立国会図書館デジタルコレクション（<http://dlndi.go.jp/info:ndljp/pid/952812>）参照。

7 『大慧普覚禅師書栲栳珠』（禅文化研究所影印本、一九九

七）五三五頁に「忠曰く〈空谷の響きを接するが如し。

謂うところは実無きなり〉とある。

8 注6参照。

9 注6参照。

10 加地伸行『漢文法基礎 本当にわかる漢文入門』（講談社

学術文庫、二〇一〇）五六七頁参照。

11 前掲『日本近代史を学ぶための文語文入門』一六頁参照。

12 注4（思文閣出版影印本は三五〜九頁）参照。

13 注10参照。

14 『論語』子罕篇に「子曰く〈後生畏るべし。焉んぞ来者

の今に如かざるを知らんや〉とある。

- 15 前掲『漢文法基礎』四二二頁参照。
- 16 『全訳漢辭海』第二版（三省堂、二〇〇八）一五六六頁参照。
- 17 花園大学図書館「授業の参考文献」西田太一郎『新訂漢文法要説』（朋友書店、一九九八）一六・三三三頁参照。
- 18 前掲『日本近代史を学ぶための文語文入門』一〇七・八頁参照。
- 19 古田島洋介・湯城吉信『漢文訓読入門』（明治書院、二〇一一）四二頁参照。